

中国における秦漢代の瓦調査

1994年3月3日から20日まで、中国社会科学院考古研究所と共同して、中国秦漢代の瓦に関する調査をおこなった。これは日本芸術文化振興会の芸術文化振興基金をえて、古都調査保存協力会の平成5年度事業として実施したものである。研究所からは5名（黒崎直・毛利光俊彦・大脇潔・牛島茂・岸本直文）が参加し、中国社会科学院考古研究所の洛陽工作站と西安研究室で資料調査をおこなった。洛陽での調査は当初の予定になかったが、快諾をいただき、『洛陽中州路』（1959年）に報告されている遺物を中心に、漢魏洛陽城・隋唐洛陽城の資料を調査した。西安では、前漢第9代の皇帝である宣帝の杜陵の陵園出土資料、秦漢代の櫟陽城および前漢の高祖劉邦が父親のためにつくった太上皇陵の資料を準備いただいた。両者をあわせて計157点について観察のうえ写真撮影し、必要なものの実測・採拓などの作業をおこなった。

今回、おもに秦漢代の瓦を対象として資料調査をおこない、軒丸瓦の製作技術の上で前漢代が大きな変革期であったことを確認した。あわせて、そこにいたるまでの中国の瓦の起源と発達について関心をはらい、見学に足を伸ばした各所でも、展示されている瓦について可能なかぎり観察した。そこで、西周にさかのぼる中国の瓦の発展過程を概観した上で、前漢代の技術革新についてふれよう。

西周の初期に生まれた最古の瓦は、新石器時代の龍山文化期以来つくられてきた上・下水道用の土管（陶水管）を母体とする。つまり、粘土紐（泥条）を巻き上げて（盤築）、内面に当て具をあて、タタキによって成形した土管を、2分割ないし3・4分割することによって曲率をもった瓦としたのである。当時まだ草葺きであった宮殿の棟にまず使われ、やがて屋根の谷部分や軒先などに葺くようになり、西周中期には屋根全面を葺くまでにいたる。この間に、より曲率の緩い瓦をならべ、その隙間を曲率の強い瓦で覆うことが定まり、平瓦と丸瓦に分化する。

西周中期のBC10世紀の頃には、軒先のために瓦当部をとりつけた軒丸瓦が出現する。瓦当となる粘土円盤の上に粘土円筒を形づくり、ヘラ切り、のちには糸切りによって半截して二つの軒丸瓦をえた。これが半瓦当と呼ばれる半円の瓦当をもつ軒丸瓦である。無文のものから、ヘラ描きの文様を入れるようになり、戦国時代に入ったBC4～3世紀には、文様を刻んだ範型におしつけて同じ文様の軒丸瓦をつくるのが始まる。やがて戦国時代のうちには円瓦当が現われ、秦漢代以降に主流となる。

前漢に入ると、これまでの製作技術に変化がおこる。丸瓦部の成形に模骨を使うことが始まるのである。今回の調査で、模骨を使い始めた頃の一技法を新たに確認することができた。それは「分解式模骨」（仮称）というべきもので、西安研究室での櫟陽城および太上皇陵出土瓦の観察から推定するものである。これらは、丸瓦凹面が平滑で布目をともなうことから、模骨に布をかぶせ粘土紐を巻き上げ

瓦当裏面にのこる「分解式模骨」の痕跡（左・中 櫟陽城出土、右 太上皇陵出土）

て成形したことは明らかである。これらの瓦当裏面は平らではなく、3ないし4面から構成されていて、段差をともない、面の境にバリ状のはみ出しがある(写真)。したがって、複数の材を組み合わせた模骨であったことは間違いない。大きくは隅丸長方形の中心材と、それを両側から包む三日月形の側材の三つからなる。丸瓦部を瓦当と一体としてつくることに変りはないので、玉縁のつく丸瓦狭端側から模骨を抜かなければならず、一木ではなく組み合わせにする必要があったと考えられる。まず中心材を引き抜き、側材を内側にはずして抜き、引き続いて布を取り去ったあと、丸瓦を半截して軒丸瓦をえたのである(下図)。こうして丸瓦部の成形に型が導入され、製品の規格性をより高めるとともに量産が可能となったであろう。なお、こうした瓦当裏面に組み合わせ模骨の圧痕を残すものに限って、瓦当中央に穿孔が認められる場合が多い。これは瓦範に取り付けられたピンによるもので、模骨にあげられた孔に通すことで、瓦当の心と模骨の心を合わせる工夫であったと考えている。

やがて、前漢中頃のBC100年前後には、あらかじめ別につくった丸瓦を瓦当に取り付ける方法が登場する。それまでの製作技術が、瓦当と丸瓦部を一体として作るもので、日本でいうところの一本作りであったのに対し、この段階で接合式へと転換するのである。今回調査した杜陵陵园(宣帝の没年はBC49年)出土の一括資料が、すべてこの方法による製品であった。その後は、瓦当と丸瓦の離脱を防ぐ工夫を重ねながら、この接合式による軒丸瓦の製作が発展していく。百濟から伝来した日本古代の軒丸瓦の大多数は、この方法による。

以上のように、長い間にわたって続いた粘土紐巻き上げタタキ成形による軒丸瓦の製作が、前漢代には模骨を使った丸瓦を瓦当に接合する方法へと大きく転換する。今回、明らかにできた「分解式模骨」を使う方法は、模骨を使いながらも従来の成形方法をとるもので、この転換にいたる前段階に試みられた一技法と位置づけることができる。これまでも、瓦当裏面の凹凸については注意されていたが、実物資料の観察によって、その製作技術を推定できたことは大きな成果である。この技術は、秦末から前漢初頭に登場し、前漢中頃までのごく短い期間におこなわれたらしい。また接合式への転換については、BC87年に没した前漢第7代の武帝の茂陵から接合式の軒丸瓦が出土しており、さらに武帝の太初元年(BC104年)以前に作られたと考えられる軒丸瓦についても接合式であることが知られているので、前漢中頃の紀元前100年前後までさかのぼるようである。

中国では瓦当文様を中心に研究が進み、製作技術については従来あまり論じられてきていない。そのため、報告書でも主として瓦当の写真や拓影が掲載されており、瓦当裏面等に関する記載が少ない傾向がうかがえる。中国の瓦の製作技術的な検討はこれからの研究分野であり、日本における研究成果を加味して観察を進めれば、さらに多くの成果をえられるであろう。今後、中国側との共同研究がますます深化することを期待したい。

(岸本直文)